

円珍における『法華論』解釈について——『法華論記』における教判説を中心に——

萩 野 翔 太

はじめに

本稿では円珍（八一四—八九二）の『法華論記』を天台思想史上に位置づけるための基礎的作業として、『法華論記』における教判説の記述に焦点を当て、円珍の『法華論』解釈の特徴を検討する。

『法華論記』は、世親（五世紀頃）造の『妙法蓮華経論優婆提舍』^①（以下、『法華論』）に対する注釈書である。『法華論記』の全体的な特徴は、智顗（五三八—五九七）説灌頂（五六二—六三二）記の『法華文句』や湛然（七一—七八二）の『法華文句記』をはじめとする天台章疏を多く引用し、天台の立場から『法華論』を注釈している点や、密教による解釈は僅かである点などが先行研究において指摘されている。また、随所において吉蔵（五四九—六二三）の『法華義疏』や基（六三二—六八二）の『法華玄贊』などにもとづく解釈を批判していることなども指摘されている。実際に『法華論記』を確認すると、これらの指摘は概ね首肯できる。一方で、『法華論記』で扱われている個別の教説に関しては、検討の余地が残されて

いる。『法華論記』自体は十卷十七冊にも及ぶ大部の書であるが、その多くが天台章疏からの引用であり、円珍の自説部分は少ない。冒頭から分科と随文解釈がなされているが、論題の注釈や玄義的な解釈はない。このため、円珍の他の著述と思想の面で比較可能な箇所を除き未だ明らかになっていない点が多い。また、『法華論記』^④は随所で基の『法華玄贊』による『法華論』の解釈をはじめとする法相宗の教説を批判している。この点から、最澄（七六六／七七七一—八二二）と徳一（七六〇頃—八四〇頃）による一三権実論争の延長に『法華論記』を位置づけることも可能であろう。しかし、『法華論記』には現存する最澄の諸文献からの直接的・間接的な引用が現時点で確認できない^⑤。また、最澄以降の論争を継承している源信（九四二—一〇一七）の『一乗要決』には『法華論記』の引用を確認することができない。このような点も相まってか、『法華論記』を天台宗と法相宗の論争史上に具体的に位置づけることは確認した限り未だなされていない^⑥。

そこで、本稿では『法華論記』の思想や教学史上の位置づけを明

らかにするための足がかりとして、教判に注目する。教判は、特定の人師や学派・宗派の經典觀、教学大系を知る上で重要である。そのため、円珍が教判をいかに理解し、注釈に用いていたのかを知ることは、『法華論記』の思想を検討するために欠かすことができない。『法華論記』には、教判のことを詳細に論じる箇所はないが、天台の教判を踏まえながら注釈する箇所がある。そこで、まず円珍が依用した教判説の大枠を確認する。次に、八教や四教などの『法華論記』における教判の用例を抽出検討し、円珍の『法華論』解釈にみられる一特徴を明らかにする。

一、円珍が依用した教判説について

天台宗に属する円珍が依用した教判の大枠は、五時（華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃）と化儀四教（頓・漸・秘密不定・顕露不定）、化法四教（藏・通・別・円）からなるいわゆる五時八教である。^⑦ また、湛然の教学を受容していることから、『法華經』を他經と比べて格別な經とするいわゆる法華超八、超八醍醐の説も依用している。これに加えて、入唐中（八五三―八五八）に良諤から授かった教説や、最澄以来の日本における天台教学の影響も受けていると見てよい。先行研究においても、円珍が法華超八の教判説を主張していることは種々述べられている。^⑧ 特に、円珍以前の日本天台の諸師と異なる点は、良諤の説をもとに法華超八の理論を展開したためであるという指摘もなされている。^⑨ 例えば、円珍が晩年に撰述したと

言われている『授決集』の「法華不摂八教中円教決第四」^⑩では、八教が『法華經』を摂することがないと論じられる。ここでは、法華超八の典拠にあたる經疏や良諤の釈が引用された後に、

絶非_レ八教摂。既言_レ出_レ頓漸外。請觀_レ竟字。何以不_レ觀_レ之。将_レ出外之円_レ入_レ于頓漸内_レ乎。籤中与奪、約_レ相對門_レ暫設_レ与義、実非_レ正義_レ（記云。「先約_レ相待_レ以判_レ僞。次約_レ絶待_レ以弁_レ妙」。可_レ以_レ此会_レ籤文_レ也）。彼八中円、是所生之円、能帰之円、所融之円、帶僞之円、如_レ是不_レ及更不_レ可_レ計。故依_レ絶待_レ奪義為_レ正。若猶以_レ与為_レ正義_レ者、豈与_レ兼別之円、对_レ三之円、带_レ二之円_レ異乎。大乖_レ經疏記等極成之旨。漸頓混合部円教円、是合非_レ不合。会_レ三八教_レ帰_レ一。是醍醐非_レ四味。不然并会親族国王大臣諸文、恐為_レ徒設。言_レ混合_レ者、非頓非漸究極之円也。既融_レ四味_レ成_レ於醍醐、更無_レ他味。再三說言_レ唯有_レ一乘。教部俱円更覓_レ何文。猶若不_レ会_レ（会者知也）。担_レ經覓_レ經。何異_レ盲聾。台山両答未_レ究_レ宗意。今示_レ誠文。後賢詳_レ之。

（智證全上・三三八頁上―下）

とあり、『法華經』が八教におさまるものではないことが示される。そして、湛然の『法華玄義釈籤』に説かれる与釈と奪釈のうち、相待門の立場から与釈の義を設けるのは正義でないことが述べられる。与釈の立場での円教は、兼別の円（華嚴時）、对三の円（方等時）、

帶二の円（般若時）と同じであり、純粹な円教でない。このため、絶待の立場から尊義を正義とすることが示される。また、「台山兩答未究宗意」とあるように、円澄問の「唐決」における広修と維錫による答えを宗意を極めていないとする。

円珍が依用した教判説の大枠は概ね以上の通りであろう。このことを念頭に置きつつ、次章から『法華論記』の教判に関する用例を検討していく。

二、『法華論記』における八教

『法華論記』には、教判を詳細に示す箇所はない。また、経ではなく論ということもあつてか『法華論』自体を教判上どこに位置づけることができるのかを論じることとはなされない。¹²このため、円珍が『法華論記』において天台教判をどのように依用したかについては、八教や四教などの用例を抽出し、検討していく必要がある。

先述したように、円珍が依用した教判はいわゆる五時八教や法華超八の語そのものの説であるが、『法華論記』では五時八教や法華超八の語そのものを確認することはできない。基本的に八教が使用されており、成語に近いものとして四時八教の語が使用されている。また、法華超八の語自体は確認できないが、法華超八に相当する記述は確認することができる。そこで、本章では「不摂八教」の記述がなされている箇所と、先行研究で目立った指摘がなされていない四時八教の語の用例を中心に検討していく。

二一、「不摂八教」の用例

『法華論記』には、「不摂八教」の用例が一箇所ある。先行研究においても法華超八の用例として指摘されているが、「不摂八教」がどのような文脈で取り上げられているかについては検討がなされていない。¹³そのため、本節では「不摂八教」が用いられるまでの記述を踏まえて検討していく。

「不摂八教」は『法華論記』卷三本における、『法華論』の「依止説因成就者」¹⁴以降の文を注釈する箇所にある。そこには、

論「依止説因成就」已下、第五釈「依止説因円満」。大分爲二。
第一釈論文。初氣文。第二釈「瑞相」。（智證全上・八七頁上）

とあり、最初に『法華論』の文に対する注釈がなされ、次に瑞相に対する解釈する箇所がなされる。このうち、「不摂八教」は瑞相を解釈する箇所にある。瑞相を解釈する箇所では、

第二釈「瑞相」者、今依「師宗」帖「釈經論」令「文分明」。大師釈曰。「放光」一瑞若分「其文」属「此土第六相」。若属「他土」即是総相照「他土」文。次明「光照」他土「六瑞」者、一見「六趣」、二見「諸仏」、即是上聖下凡爲「一双」。今指「文捩」。從「爾時仏放眉間白毫相光」下迄。「又見彼土現在諸仏」也。即是論文「器世間及衆生世間數量種種具染差別」及四種觀中第一食也。三聞「仏說法」。

四見_二四衆得道_一。即是人法一_二双_一。今指_二文処_一。從_二「及聞諸仏所説經法」_一下迄_二「諸修行得道者」_一也。即是論文「具淨差別仏法弟子差別示現三宝并乘差別」半、及四種觀中第二聞法、第三修行半分へ矣。五見_二菩薩行_一行。六見_二仏涅槃_一。即是始終一_二双_一。今指_二文処_一。從_二「復見菩薩」_一下迄_二「起七宝塔」_一也。即是論文「三宝示現并乘差別」及修行後半与_二第四衆_一也。

(智證全上・九〇頁上)

とあり、まず『法華文句』が引かれる。『法華文句』では、『法華經』とそれに対応する『法華論』の文と食・聞法・修行・衆の四種の觀¹⁵が示される。そして、

師生起曰……「及聞諸仏所説經」者、是現_下彼仏初從_二無相一_一法_一非_レ頓而頓、与_二此土初説_二華嚴_一意同_上也。從_二「并見諸比丘」_一下、是現_下彼仏非_レ漸而漸、与_二此土仏次説_二三藏_一意同_上也。從_二「復見諸菩薩」_一下、是現_下彼仏三藏之後説_二方等般若衆經_一、与_二此土仏三藏之後_一意同_上也。從_二「復見諸仏」_一下至_二「起七宝塔」_一、是現_下彼仏般若之後開權顯実、從_二無量法_一還入_二一法_一、唱_レ入_二涅槃_一息_レ化起_二塔_一。光照_二彼土_一始終究竟、炳然在_レ目。当_レ知、此土從_レ一出_二無量_一非_レ頓而頓、非_レ漸而漸耳。其事已竟。必当_下取_二無量法_一還入_二一法_一、開權顯実息_レ化歸_レ真与_二彼土_一同_上也。六祖演曰。「生起中……「開權」即是法華之相。「息化」即是涅槃之

徴。「非頓而頓」等者、法華一乘非_二頓漸_一撰。於_レ一開出、乃有_二頓漸_一。是故今日_二「非頓而頓」_一。「非漸而漸」、准_レ此可_レ知。言_二「從_レ一出無量」_一者、始從_二華嚴_一至_二般若_一來皆從_二一法_一開出。至_二般若_一時頓漸已竟。而人不_レ知_二法華出_二頓漸外_一。請觀_二竟字_一、法華但是收_二無量_一以_レ歸_レ」へ已上文。

(智證全上・九〇頁上—九一頁上)

とあり、『法華文句』と『法華文句記』の文が引かれる。特に、『法華文句記』では『法華文句』の「非頓而頓」などの文を注釈して、法華經が頓漸におさまるものではないことが示される。そして、

今以_二大師三同及以四味_一一_二釈論四句_一。論文「食」「法」「修行」、釈「此彼諸仏道同及現彼土已与此同」。論文「樂」者、釈「現此土当与_レ彼同」。上來三同竟。論文「食」者、对_二經_一「放光乃至又見六趣衆生」。此釈「現彼仏為五濁故出世、此仏亦爾、二土出世意同」。論文「聞法」、对_二經_一「及聞諸仏所説經法」。是釈「現彼仏初從_二一法非頓而頓_一、与此土初説華嚴意同」。論文「修行」、对_二經_一「并見彼諸四衆諸修行得道者復見菩薩行菩薩道」。此釈「現彼仏非漸而漸、与此土仏次説三藏、及彼仏三藏之後説方等般若衆經、与此土仏三藏之後意同」。論文「樂」者、对_二經_一「復見諸仏涅槃槃者乃至起七宝塔」。此釈「現彼仏般若之後開權顯実、從_二無量法還入_二一法_一」。

(智證全上・九一頁上—下)

とあり、大師（智顗）が、三同と四味によって『法華論』の文を解釈することが説かれ、『法華論』の文に対応する『法華經』と『法華文句』の文が引かれる。そして、四味によって解釈する箇所では「不摂八教」が次のように示される。

准論文義意炳然在眼。不摂八教其義灼然。衆生根量千般万殊。諸仏設教随彼万端。宿殖不同惑有厚薄。惑有厚薄智有浅深。有浅深故現大小乘。乘有欣厭、現仏唱滅。縁滅利生故起塔廟。此彼二土種種設化不出八教。化儀藥方化法藥味。逗病設藥令得服食。得服食已令忘藥病。故前四時調熟衆生、後至醍醐悟入実相。（智證全上・九一頁下）

ここでは、『法華論』の文義に準じるのであれば、先に述べた意味は明らかであり、八教をおさめないことが明確であることが示される。衆生の機根には種々あり、彼此の二土における仏の種々の教化は八教をでることがない。また、前四時において衆生が調熟されて第五時にいたって実相に悟入すると説かれる。そして、『法華經』が八教を摂さないことについて、

此宗学者或疑法華摂八教否、未見此文。只見籤中与奪之義、謬有疑慮。須以籤文与此勘会。孤疑氷积見星中月。一葉王十喻歎純一教。応知其意委积如別。更积因縁如疏及

円珍における『法華論』解釈について

記。釈四味竟。

（智證全上・九一頁下）

とあり、此の宗（天台宗）の学者が『法華經』が八教を摂すか否かの疑問がでるのは、この文（『法華文句』、または『法華文句記』）を見ていないためであることが述べられる。このような疑問がおきるのは、『釈籤』の与義奪義の文を見て、誤って疑問をおこしているためであるとする。そして、『釈籤』の文とこの文（『法華文句』、または『法華文句記』）を照らし合わせることで、疑いが解消すると説かれる。

ここでの「不摂八教」に関する指摘は、円澄（七七二―八三七）による「唐決」での疑問に対するものであるとみてよい。円澄の疑問は次の通りである。^⑩

問。釈籤云。「今法華是顕露等者、対非秘密故云顕露。於顕露七中通奪而言之並非七也。別与而言之但非前六。何者七中雖有円教、以兼帶故是故不同。此約部説也。彼七中円与法華円其体不別故但簡六。此約教説也。」（已上文也）。今尋文意、若約与義則法華經同八中円。若爾此經亦為頓漸化儀摂之、為不摂耶。又約奪義則非八摂。若爾者此法華經為何化儀、為化法。此義如何。

（新纂五六・六八三頁中―下）

ここで引用される『法華玄義釈籤』の文は『法華玄義』の「今法華是顯露非秘密」是漸頓非漸漸、是合非不合、是酬醒非四味、是定非不定。如此分別、此經与衆經相異也¹⁷⁾に対する注釈である。湛然は、「今法華是顯露」などというのは、『法華經』は秘密教ではないことに対して顯露教と言うのであると説く。顯露教における七教の中では通じて奪えば七教ではなく、別して与えれば前の六教ではないとする。まず、七教の中に円教があるといつても、『法華經』以外の諸經では藏・通・別・頓・漸・不定と円教を兼ねていたり帯びていたり（兼帶）するため、『法華經』の円教と同じではない。この点は部の立場で説いていると述べている。次に、七教の中の円教は『法華經』中の円教と体は別ではないため、六教を選び捨てている。この点は教の立場で説いていると述べている。

この『法華玄義釈籤』の文について、与義の立場ならば『法華經』は八教の中の円と同じであるが、化儀四教には摂せられるのかと問う。また、奪義の立場ならば『法華經』は八教に摂せられることはないが、その場合『法華經』は化儀四教と化法四教のどちらになるのかも問う。

円珍はこのような問ができること自体を『法華玄義釈籤』における与奪の文のみを見ているためであると捉えている。『法華論記』に引用される『法華文句』や『法華文句記』、注釈対象の『法華論』の文は、「唐決」の広修と維錫の答文の中には確認できないが、『授決集』における「不摂八教」の根拠として彼此六瑞に関する『法華

文句』と『法華文句記』の引用がなされている¹⁹⁾。円珍が教わったのか独自に見いだしたかは不明だが、「不摂八教」の根拠として一貫して依用していたとみてよい。なお、『法華論記』では、問いを起すことに対する指摘に留まっているが、前章で引用した『授決集』においては「台山兩答未究宗意²⁰⁾」と、その答えに対して言及している。

このように、円珍は『法華經』が八教を超出していると説くのであるが、『法華論』そのものからではなく、引用された『法華文句』と『法華文句記』を踏まえて論じていたとみてよい。

二二、四時八教の用例

『法華論記』においては、五時八教の成語は確認できないが、四時八教の用例が確認できる。例えば、『法華論記』巻一本における『法華論』の序分成就を注釈する箇所では次のように示される。

論「一者」已下正列三種勝義。言「一切諸法門中最勝」一者、略歎法体。故知、論主全許一部為法門中勝、方指如是等為一切法門中勝。一切法門即一代教。不然如何消釈一切之言。既一代教中最為其上、具如藥王品中歎經文也（已上文）。一代教者、四時八教。故玄文曰。「在四味教之頂。離四種誹謗」。論意如斯。人多不識。
（智證全上・三頁上―下）

『法華論』の序分成就では、『法華經』の教えの中で二種の勝れた意義が完成していることが示される。一種目が諸法門の中で最勝の義が完成していることであり、二種目が自在である功德の義が完成していることである。引用した箇所では、一種目に対して注釈している。このうち、書名は出ないが、『法華文句記』の文が引かれる。²¹⁾

『法華文句記』では、世親が『法華經』を一切の諸法門の中において最勝であることを認めている、と説かれる。また、一切の法門が一代教であること、一代教の中で『法華經』が最上であることが述べられる。これを踏まえて、円珍によって一代教が四時八教と規定される。その後、『法華玄義』の「乳味・酪味・生蘇味・熟蘇味の」四つの味の教えの頂きにあり、〔斷無・建立・異・尽の〕四つの誹謗から離れている²²⁾という文が引かれる。そして、論の意はこのとおりであり、天台以外の人たちは多くこのことをしらないと述べる。『法華玄義』の引用文を踏まえると『法華經』が四味の頂点にあり、四時八教に撰せられないことを主張しようとしているとみてよいであろう。このように、円珍は釈迦一代の教を天台の教判によって規定するのである。

一方で、一代教を四時八教とすることには問題がある。天台の教判では、釈迦の一生涯に説いた教えを時節の面から華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃の五時で分類する。このため、「五時」ではなく「四時」とすると単純に一生涯に説いた教えではなくなる。四時は八教をおさめつくすので、『法華經』以前の教えとして、四時八

教の語を用いること自体は問題ない。なお、円珍以前に撰述された章疏を確認した限りでは、四時八教の語は確認できなかったが、『止観輔行伝弘決』には八教四味の語が確認できる。²³⁾

このように、法華時以前の教えとして四時八教の語を扱うことは可能であるが、あくまで当該の箇所は一代教を規定しているのである。このため、ここでの四時は誤写の可能性もあるが、他に三箇所ほど四時八教という語が用いられている。また、一箇所だけであるが八教四味の用例もある。このため、四時八教は単なる誤写でなく、意図的に用いられた可能性もある。そこで、他の三箇所における四時八教の用例と八教四味の用例を確認していく。

まず、一箇所目は『法華論記』巻二における『法華論』の「此大乘修多羅有二十七種名。顯示甚深功德。応_レ知_二」を注釈する箇所に²⁴⁾ある。

論「此大乘修多羅有十七」已下、第二別釈。於_レ中有_二四。初標起、二列釈、三料簡、四結指。且初第一言「此大乘修多羅」者、指_二卷經。義通_二序正。即_レ拳_二總目。有_二十七種_一者、正標別名。「顯示甚深功德」者、略顯_二名下勝義。從_レ昔已來未_二曾顯_一說十七句義。句勝_二於四時八教淺近功德。故曰_二「顯示甚深功德」。十功德品曰。「世尊演_二說無量義經真實甚深甚深_一。其義可_レ知。「応知」者、此結生也。
(智證全上・五五頁下)

ここでは、『法華論』で示される「無量義」や「最勝修多羅」などの『法華經』の異名として知られる十七種が、四時八教という浅はかな功德より勝れているので、「顯示甚深功德」というのであることが示される。

二箇所目は、『法華論記』巻五における『法華論』の「彼三乗者、唯名字章句說非有実義故。以彼実義不可說故」を注釈する箇所にある。

論「彼三乗唯名字章句說非有実義故」者、釈三乗權義。法本寂滅無有_レ名相。但為_レ撰誘_二假說_一三權。無有_レ奇味。猶如_二四河_一。四時八教悉為_二引攝_一。皆假名句不_レ談_二仏意_一故無_二実義_一。經下文云「但以假名字引導於衆生」一、即其文也。

(智證全上・一六一頁上)

ここでは、三乗が權義であることを解釈している。法はそもそも名やすがたは存在しない。しかし、真実である一乗に引き入れるために、かりに三乗を立てると述べられる。そして、法華時において四時八教を悉く引き入れる。このため、名称や句などは仮のものであり仏意を談じていないので実義ではないことが論じられる。

三箇所目は、『法華論記』巻五における『法華論』の「三者不知義、以一切声聞辟支仏不_レ知_二彼真実處_一故。不_レ知_二真実處_一者、不_レ知_二究竟唯一仏乘_一故。如_レ經「欲_レ令_二衆生悟_二仏知見_一故出_二現於

世_二」を注釈する箇所にある。

論「三者不知義」下、釈三不知義。文中有_二。初標_一名釈義。次指_二經文_一。言「不知」者標。「以一切声聞辟支仏不能知彼真実處故」者、正顯三不知。大師釈曰。「雖三乗同有_二而二乗不_レ悟、示_レ其令_レ知_一。転_二前不知_一成_二今日知_一。「彼真実處」者、仏性法身也。性有三種。身亦三種。性本身修。其義應_レ知斥_二彼不知_一示_二此仏乘本末究竟_一凡聖無_レ別。仏性扱_レ本仏乘在_レ修。修性似_レ殊。其体不_レ一。指_二久後妙說_一為_二究竟唯一_一。四時八教會所未_レ聞故云三不知。

(智證全上・一六四頁上)

ここでは、『法華論』における声聞や縁覺が真実處を知ることがないことを解釈している。久しくなつて後に妙說を指して究極的な唯一の教えとする。そして、声聞と縁覺が四時八教をこれまで聞いたことがないので「不知(知らない)」というのである。

四箇所目である八教四味の用例を確認する。『法華論記』巻九末における『法華論』の「略者、多宝如来身一体、示_二現攝取一切仏法身_一故_⑦」を注釈する箇所にある。

論「略者多宝如来身一体示現攝取一切仏法身故」者、第四明_レ略。所_レ言略者即是總也。多宝表_二法仏_一、釈尊表_二報仏_一、分身表_二応仏_一。三仏雖_二三而不_二一異_一。不異之故法身一体。故名_二多宝_一。

不一之故遍^二滿法界。故云^二一切。今拳^二總体^一撰^二一切身^一同為^二一体。多宝分身及以釈尊皆是毘盧遮那法身。故云^二「多宝仏身一体示現撰取一切仏法身故」^一。問。法身唯一、応化無量。何故法多。答。理事体用内外周遍、常一常多。本来如此。然今法華撰^二会十方三世八教四味。同体別体。一切法身歸^二於本地一醍醐身。故云^二「多宝如來身一体示現撰取一切仏法身故」^一（云云）。（智證全上・二八七頁下―二八八頁上）

ここでは、『法華論』における多宝仏の身体は一体だけで一切の仏の法身をおさめとることを示す点について解釈している。特に、法華の会座において、十方三世、八教四味の仏身をおさめとる。一切の法身が本地であるの醍醐身に帰すと述べている。

以上、計四箇所の用例を確認した。少なくとも、一箇所目と二箇所目、四箇所目は四時八教が『法華經』、第五時法華涅槃時、第五味醍醐味より下に位置づけられると捉えられている。このことから、『法華論記』における四時八教は法華時以前の教えの意味合いとして用いられていることが分かる。四時八教の語は円珍の中で定義されていることから、釈迦一代の教を四時八教と誤写することは考えにくい。伝写の過程で誤写があった可能性もあるが、現時点では判然としない。ともかく、『法華論記』の当該の箇所では、『法華文句記』の「一切法門即一代教……既一代教中最為其上」の「最為其上」を『法華經』と捉え、一代教を四時八教と解釈した。『法華文

句記』の記述を踏まえて、注釈対象である『法華論』の「一切諸法門中最勝」の文についても、「一切諸法門」を四時八教、あらゆる法門の中の「最勝」を『法華經』と解釈したとみてよい。あくまで『法華論』の文を解釈する中で一代教を四時八教と捉えたのであるう。

このように、「不撰八教」や四時八教の用例を検討したが、いずれも法華超八を念頭に用いている^⑧。

三、他学派・他宗派の教説の位置づけについて

『法華論記』においては、四教や八教といった教判の語をもとに解釈する箇所は散見される。

そのような中で、四教による解釈の有無が教説の採用基準として用いられている箇所がある。義寂撰義一記の『法華經論述記』を用いる箇所である。『法華論』の序分成就の文を解釈する中で『法華經論述記』が「寂徳曰^⑨」と引かれる。

次「耆闍崛山勝」者、次顯^二所統^一。於^二五山之中^一此山独勝。故言^二「勝余」^一。一切諸仏皆住^二此山^一。是從^二能住^一為^レ勝。三世正覺恒於^二其中^一説^二法華經^一。是從^二法門^一為^レ勝。大師釈曰。山即法性正因、不動名^二秘密藏^一。則本仏住處^二三徳所鎮^一。故言^二「勝余」^一。煩惱所知為^二一切山^一。中道法性為^二靈鷲山^一。故言^二「勝余」^一。又寂光王城実報靈山、山城相即理智不二。如^レ斯城山永異^二諸教^一。

故言「勝於一切城山」。本有四德為城、修德四德為山。此城与山体相平等遍一切处。無能勝者。所以言勝。如是消釈尚恐非。況習權輩。寧誰得相応。寂徳曰。「城之与山表正説中両甚深義」。此解無失。但不識四教釈義無捩耳。今借彼言顯於円理。不違自他。

（智證全上・四頁上）

まず、教えが最も優れたものであることの譬喩として、王舎城と耆闍崛山が他の全ての城と山の中で最も優れていることが示される。そして、『法華經論述記』の「〔王舎〕城と〔耆闍崛〕山が正説分の中の両甚深（阿含甚深・証甚深）の義を顕している」とする解釈が引用され、この説には過失がないと述べられる。一方で、四教（化法四教）をしないので、その釈義に依らないことも示される。なお、『法華論記』における『法華經論述記』の引用は要約された形であることが前川「二九九五」によつて指摘されている。³⁰ 該当する『法華經論述記』の文は次の通りである。

「示現諸法門中最勝義成就」者、謂妙法功德。証甚深、於諸法中「最勝義故。阿含甚深、於諸門中「最勝義故。

（新纂統藏四六・七八一上）

『法華論記』の引用では略されているが、『法華經論述記』では、『法華論』の「さまざま教えの中で最も優れている意義が完成し

ている」ということを「妙法の功德」としている。おそらく、この記述を踏まえて、『法華論記』では、『法華經論述記』の解釈に過失がないとしたのであろう。

このことから、単純な語義解釈は別として、³¹ 解釈を採用する基準の一つが、天台の教判を踏まえているか否かであったことを窺うことができる。また、四教を基準に解釈することは他の箇所でも確認できる。例えば、『法華論記』巻一本における『法華論』の序分成就の第二行成就、「二者諸菩薩修大乘行」を注釈する次の箇所にある。

論「二者」下、二挙「大行諸菩薩」者能行人也。此曰「大道心衆生」。對「諸声聞小道心者」故言「大道心」。約「教言」之。教教皆有。謂六度通別円也。菩薩行位本来一階。何有「四別」。答。執「權之徒不知四教」。但執「一階」。今約「大小諸乘」建「立四階」。則小乘六度菩薩、三乘共行菩薩、独行菩薩、円行菩薩。如「俱舍婆沙大小瓔珞大品智度」。必定入定。華嚴法華所明矣（云云）。悲夫世人未領此義。

（智證全上・六頁下―七頁上）

ここでは、菩薩の行位体系は本来的には一つではないのか、という問いに「権（の教え）」に執着する徒は四教を知らない。ただ一つの階段に執着する」と答える。そして、大乘小乗の様々な乗り物の立場に立てば、小乗教の六波羅蜜を行じる菩薩（藏教の菩薩）と、

大乘の三乗に共通する行をする菩薩（通教の菩薩）、三乗に共通しない行をする菩薩（別教の菩薩）、円満な行をする菩薩（円教の菩薩）、という四教の菩薩があると説かれる。そして、「悲夫世人未領此義」とあるように、世の人がこの義を理解していないことが示される。

また、「世人」と四教に関する同様の例が、『法華論記』巻一末における、『法華論』「八地者、無功用智不同下上故」³³を注釈する次の箇所にある。

今釈、第八地入無功用。義通融疑滯。世人未會四教。又迷接義。徒立二種菩薩。未會如來玄旨。言二種菩薩者、一智増上菩薩、二悲増上菩薩。智増菩薩從初歡喜地入無功用位。悲増菩薩至第八地入無功用。何以故。智増菩薩自行為先早斷煩惱。故從初地得入無功用。悲増菩薩化他為先故留惑累。至不動地方乃斷惑入無功用。故諸經論說初地証皆捩智増說。八地入捩悲増上。已上人語。今謂、此釈雖似通經大以迷教。龍樹天親悉述弘意。後人無識濫釈謬會。故今示正。夫仏説教總有四階。謂藏通別円。即四乗教也。人暗斯旨。謂經論中無有四教。宛如身子梵王異見。教既四種位地亦爾。小乗藏教七賢七聖、通教十地、別教七位、円教六即。若悟此趣。曾無疑滯。八地所明灼然易通。所言八地入無功用者此通教第八地矣。（智證全上・三九頁上―下）

円珍における『法華論』解釈について

ここでは、第八地に無功用に入るのは、智増と悲増の二種菩薩のうち悲増菩薩であるとする説を斥ける。引用冒頭にあるように、世の人が四教を会通していないこと、さらには接義（被接義）に迷うことが示される。二種菩薩については、自身の行を先におこないすみやかに煩惱を断じ、初歡喜地で無功用に入るのが智増菩薩であり、利他行を先におこない第八地不動地で断惑し、無功用に入るのが悲増菩薩であることが示される。一方、自説を論じる箇所では、第八地を悲増菩薩によって解釈することが誤ったものであることが論じられる。まず、龍樹や世親は仏意を述べており、後代の人師は四教を知らないため誤って解釈していると述べる。そして、そもそも仏の教説には藏通別円の四教がある一方、人師は四教の道理に暗いため、經論の中に四教が説かれていないと理解してしまっていると言ふ。このため、藏通別円の四教をもとに解釈するのであれば、第八地に無功用に入る、というのは通教の第八地を指すと論じるのである。このように、円珍は悲増の菩薩ではなく通教の菩薩と解釈する。このことを踏まえて、以降の箇所では、通教の第八地から後教である別教と円教に転じていく被接義による解釈が『摩訶止観』や『止観輔行搜要記』などの記述をもとに示される。そして、被接の説をもとに『法華論』の文に対する解釈が提示される。³⁵

また、行位と絡めて「世人」が四教を知らないことを論じる同様の例が、『法華論』の「第三人者、令知種種乗」諸仏如來平等説法、随衆生善根種子生芽故³⁶を解釈する箇所にある。

増寿変易諸師声聞諍今与通_レ之。大体如_レ上_レ当_レ知。延身入変諸如_二斯言_一。此通教義。捨_レ命入_レ灰、及捨_レ身入_レ変、多約_二三藏声聞縁覚_一。得_二此大達_一莫_レ迷_二岐路_一。又菩薩以_レ誓故留_二有根身_一、至_二第八地_一方断_二随眠_一。亦約_二通教下根被摂_一。世人未_レ知_二四教義_一。亦悲智強会未_レ成。若依_二今家_一、一切疑滯融銷如_レ氷。上來番番多积_二此義_一。恐人迷故再_二載_一之。通人知_レ意。上預説_レ文。其義未_レ尽。言_二預設_一者、恐有_二大乘起_一乘同執_レ耳。

(智證全上・二〇七頁下)

ここでは、諸師による声聞の増寿変易生死に関するの見解を判じている。それによると、あくまで通教義であり、第八地で随眠煩惱を断じるのを通教下根の被接であると捉える。そしてその理由を、世の人が四教を知らないためであるとする。増寿変易に関して様々な義が立てられるが、天台義によるのであれば種々の疑が解決するとしている。

なお、増寿変易に関する問題は、この記述の直前に引用される『法華文句記』の文を踏まえてのものだと考えられる。

今具引_二叙六祖积_一增長。「二乗增長二解不_レ同。並今師意、前积得_二小乘_一尽_二生死_一方云_二最後_一。次积大乘中方名_二後身_一。大小兩種、並名_二增長_一。皆由_レ值_レ仏、衆生自謂_二当分增長_一。今准_二仏意_一莫_レ非_二地雨_一。故令_二当分遠有_一增長。所以至_レ此方知_レ合_一」。無後之

言、且任_二小教_一。權名為_レ無。非_二永無_一也。若得_二法身等覚_一。一転当_レ入_二妙覚_一。乃云_二最後_一。問。或論云。羅漢発心已後、辺際定力令_二分段身延_一至_二変易_一。不_二復仮_一報。成_二無上果_一。或云_二増寿変易_一者、此何教摂。答。今約_二宗意_一。此多属_二通義_一。以_二通菩薩過_一二乗地_一惑潤_二生身_一或不_レ経_二生而成_一正覚。豈花王仏果。而用_二二乗辺際定力_一。故応_二問言_一。此定与_二彼首楞嚴定_一同耶異耶。諸論皆云_二捨_一分段身_一而入_二変易_一。天親論主意未_レ必然。但恐积論義不_レ正耳。故知、最後之言大小各別。無_レ人有_レ教。深可_レ為_レ規。

(智證全上・二〇六頁下—二〇七頁上)

一部、『法華文句記』の文を問答体に置き換えている箇所がある。ここでは特に、分段身を延ばして変易身を得て、無上果を成ることにについては、注で「或いは増寿変易という」と補足している。そして、これが何れの教に該当するかを問う。これに対して、天台の意では多くが通教の義に属することが示される。

注釈対象である『法華論』の文は、七喻が説かれる意義を示す箇所にある。注釈対象の文は、「第三人者、令_レ知_二種種乗_一。諸仏如来平等説法、随_二衆生善根種子_一生_レ芽故_一」(第三の人(大乘人)のために、種々の乗り物のことを知らしめるのである。諸の仏・如来は平等に説法し、衆生の善根の種子にしたがつて芽が生じるのである)」とあり、大乘人のために喩を説く意義を示している。ここでは、仏が説く教えは平等であるが、教えを受ける衆生側の機根に違いがあることを説

く。注釈のための記述や引用文を見る限り、増寿変易に関する記述は、直前の『法華文句記』の文がなければ唐突感がある。このように、増寿変易生死に関する記述は、『法華論』の文そのものを注釈したというより、直前の『法華文句記』を踏まえてなされたともてよい。

以上のように、円珍は他学派・他宗派の人師が誤った解釈をするのは、四教を知らない、解さないからであると論じるのである。^{④①}なお、ここでの「世人」^{④②}が具体的に特定の人師もしくは学派・宗派を指すのかは判然としない。智増と悲増菩薩の二種菩薩や増寿変易による解釈がある箇所は、法相系の人師たちの可能性が高い。また、『法華論記』が撰述された時期を考えると、日本の人師でなく、中国で活躍した人師たちを想定している可能性もある。

おわりに

以上、教判の記述を足がかりに、『法華論記』における円珍の『法華論』解釈にみられる一特徴を検討した。

『法華論記』において八教の語は基本的に『法華経』が八教に撰されないことを説く際に用いられる。四時八教という語があるように、八教は五時判の上では前四時に撰せられると説く。一代教を四時八教と規定する箇所については判然としないところもあるが、『法華論』の文を踏まえて解釈したのであろう。また、与釈と奪釈の点からいえば、奪釈的な解釈が多く用いられていた。

次に、他学派・他宗派の人師が解釈をする説を斥ける場合に、四教（化法四教）の依用の有無を基準にしている場合が複数確認できた。そのことは、『法華経論述記』の説を過失がないとしながらも、採用しないということからも明らかである。また、法相宗の教説である智増と悲増からなる二種菩薩の説を斥ける箇所では、通教の菩薩であると論じる。増寿変易の説の位置づけを論じる際には、通教の下根であるとした。なお、本稿では検討することができなかったが、法相宗の説を化法四教の通教に当てはめるのは、実際の教説面から円珍が判定したとみてもよいが、当時の法相宗に対する天台宗側に共有されていた認識であった可能性もある。^{④③}

また、『法華論』の注釈書として見た場合、必ずしも『法華論』の文そのものを注釈しているとは言いがたい箇所も確認できた。例えば、「不撰八教」は、『法華論』の「依止説因成就」以下の瑞相を解釈する箇所にある。「不撰八教」は『法華論』そのものではなく、引用される『法華文句』や『法華文句記』の説を踏まえた上でなされている。同時代的なものとしては、円澄問の「唐決」による『法華玄義釈籤』の与奪の文に対する疑問がなければこの箇所が「不撰八教」の記述はなされなかったかもしれない。^{④④}また、増寿変易に関する箇所も同じで、『法華文句記』の記述を踏まえてなされている。天台義による注釈を行うという目的の都合によるものかもしれないが、『法華論』の注釈として見ると若干のズレが感じられる。このあたりは、当時の仏教界全般、もしくは天台宗内で問題となってい

た事項を中心に論じられている可能性が高い。このため、『法華論記』を天台思想史上に位置づけるには、同時代の仏教界で問題となっていたテーマを念頭に置きつつ思想を検討していく必要がある。紙幅の都合上、『法華論記』を具体的に天台思想史上に位置づけることについては今後の課題としたい。

註

- ① 本稿では便宜的に『大正新脩大藏經』卷二六に収録される勒那摩提訳の『法華論』を用いる。円珍が『法華論記』を撰述した際に依用した『法華論』が菩提流支訳と勒那摩提訳いずれであったかについては諸説ある。その中でも、前川「一九九五」（一〇〇頁）では敦煌本の勒那摩提訳（S二五〇四）によく一致しており、金「二〇二〇」（三五二頁―三五三頁）では入蔵以前の勒那摩提訳の古形である可能性が指摘されている。また、浅野「二〇二三」（五三頁―五六頁）によると、『法華論記』で依用された『法華論』は現存する菩提流支訳とのみ一致する場合と勒那摩提訳とのみ一致する場合があり、いずれの訳を依用したかの断定が困難なことを述べている。
- ② 浅井「一九七三」（三九一頁、木内「一九七三」（一四二頁―一四三頁）、高崎「一九七七」（三四六頁）、池田「一九七八B」（三二二頁）、河村「一九八九A」（二頁）・「一九八九B」（九四九頁）など参照。
- ③ 吉蔵や基の解釈に対する批判は、池田「一九七八A」（九八頁―九九頁）・「一九七八B」（三三六頁）や奥野「一九九二」、前川「一九九五」・「二〇〇二」・「二〇〇四」・「二〇〇五」など参照。特に、前川「二〇〇二」・「二〇〇四」・「二〇〇五」によって、方便品の釈までであるが『法華論記』に引かれる『法華玄賛』の説に対する円珍の自説箇所を中心に考察がなされている。なお、『法華論記』撰

述に際して円珍は吉蔵の『法華義疏』を閲覧できていない可能性がある。『法華論記』で提示される『法華義疏』の説は円珍が『法華義疏』をそのまま要約したのではなく、道進（生没年未詳）の『妙法蓮華經鈔』から孫引きした可能性が前川「一九九五」（九二頁―九八頁）によって指摘されている。また、吉蔵の『法華論』の注釈書である『法華論疏』の依用については、河村「一九八九」（九四九頁）では分科と援用した文献の相違点から『法華論記』を撰述する際には参照されなかったと述べている。奥野「一九九二」（一四六頁）も吉蔵の注釈書が参照された形跡がないとしている。一方で、尊通（一四二七―一五一六）の『智證大師年譜』における大中七年（仁寿三年、八五三）の条にある「寓居開元寺。便就其寺・伝教大德存^レ式。聴^レ嘉祥慈恩法華疏華嚴涅槃疏及律俱舍等義」（智證全下・一三八五下）という記述から入唐後（円珍の入唐期間は八五三―八五八）に『法華論疏』を閲覧したと指摘している。これに対し、前川「一九九五」（九七頁参照）では『智證大師年譜』を含めた『弘伝真言止観阿宗官牒』（智證全下・一三一四上）、三好清行（八四七―九一九）の『天台宗延暦寺座主円珍伝』（智證全下・一三六六頁下）における記述によって円珍が『法華論疏』を参照していたとするのは無理があると指摘している。また、入唐中の諸目録の記述から、吉蔵の『法華義疏』自体も離唐の直前まで入手できなかった可能性も指摘している。

- ④ 河村「一九八九A」・「一九八九B」や水上「二〇〇八」（一〇七頁―一四四頁）では仏身論を中心に、苦米地「二〇〇八」（五三六頁―五四六頁）では仏身論と成仏論が論じられている。
- ⑤ この点について、浅井「一九七三」（三九一頁）は「最澄等の先師の意見を全く対照しなかったのは何故であろうか。しかし、法華論と天台疏とを会合する試みは天台疏が法華論意に合致する証拠の提供の意味を有しているから、遥かに徳一の難言に応え、最澄を翼賛する所以となる」と、最澄説を補強する意図があったとの指摘を

おこなっている。

⑥ 前川「一九九五」（二〇〇頁）では、『法華論記』における『法華玄賛』の引用の多さから最澄以降展開される天台宗と法相宗との論争の文脈で読解していく必要がある点と、最澄から源信『一乗要決』にいたるまでに撰述された天台宗側の最も大部な法相宗批判の書である点を述べている。また、浅野「二〇一八」（七一七頁）においても円珍の『法華論記』を最澄と源信の間に位置づけている。いずれも、最澄と源信の間に円珍『法華論記』を置くが、最澄からの円珍への影響と、円珍から源信への具体的な影響についての検討はなされていない。

⑦ 本稿では、『法華論記』における天台円教の教判説を取り扱う都合上、天台密教の教判説には踏み込まない。

⑧ 碓「一九四八」（二一〇頁—二一九頁）、浅井「一九七三」（四一三頁—四二二頁）、小寺「一九七五」（二八一頁—二八三頁）、池田「一九七八」（一〇一頁—一〇二頁）など参照。

⑨ 浅井「一九七三」四二二頁参照。

⑩ 『授決集』に関しては紙幅の都合でこれ以上踏み込まないが、教判説に関連する「天台大綱決第一」、「四教名義指掌決第二」、「五味決第三」などの決が他にもある。

⑪ 良諤（唐天台座主）の釈によると、天台の教判には「非頓非漸」「非頓而頓」「非漸而漸」の三種あり、これによって『法華経』が八教の撰でないことが示される。『授決集』における引用は次の通りである。「今正決之。唐天台座主釈曰。『今宗判教有三種。即是一代乃至十方三世諸仏所決也。一非頓非漸、二非頓而頓、三非漸而漸。所言非頓漸者、最初所引唯此一事実之文意也。実即実相。唯仏与仏乃能究尽諸法之実相、亦是一切智之所歸地（云々）。指其教部、即是法華。次而頓即華嚴。後而漸即三昧（略及三蘇也）。実相難解難入。所以施設頓漸儀法。四十余年調熟之畢。究竟会入平等大慧実相妙理。故言「一実二權」。又頓之言義具「三意」。一頓説故爲」

円珍における『法華論』解釈について

頓。如「日出」先照「大山王」。即須弥山等。二指「円爲」頓。即円融円満頓極頓足也。今言「漸頓」。即是三昧漸、後之教頓（云々）。非「八教中化儀之頓」。当以諦聽。法華是能生之円、能会之円、能融之円、能妙之円、所歸之円故称「平等大慧、独妙一大円教也。能生「漸頓」、能会「漸頓」、能融「漸頓」、能妙「漸頓」。由此等義称「平等大慧妙法一乗」。若不「然者、非「平等」「非「妙法」也」（云云）」（智證全上・三三七頁下—三三八頁上）。

⑫ なお、『法華論記』には引用されないが、『四教義』卷十一・『維摩経玄疏』卷四には「法華論別申「法華経一円教。」（『四教義』・大正四六・七六八頁中）・（『維摩経玄疏』・大正三八・五四四頁下）と『法華論』には純一の円教が説かれており、『維摩経玄疏』卷一には「天親菩薩用「一番悉檀」造「法華論」釈「法華経。」（大正三八・五二三頁上）には世親が「一番の悉檀（円教）」によって『法華論』を造り、『法華経』を解釈したとある。『法華論記』には『法華論』が円教によって解釈されていると直接言及する箇所はないが、『四教義』や『維摩経玄疏』で述べられるような理解は、根底にあった可能性がある。

⑬ 先行研究においては、円珍による法華超八の用例として指摘されている。浅井「一九七三」（四一六頁、四二〇頁—四二二頁）、池田「一九七八」（一〇一頁—一〇二頁）。

⑭ 大正二六・三頁中。

⑮ 『法華論』では「数種種者、示現種種觀」故。略説「四種觀」。一者食、二者聞法、三者明修行、四者樂」（大正二六・一三頁上）とあり、種々の觀察を食・聞法・修行・樂の四種で要約する。

⑯ 引用する円澄の問は、便宜的に維錫答「唐決」の問を用いた。大正三三・六八四頁上。

⑰ 広修の答は新纂統藏五六・六七三頁中—下、維錫の答は新纂五六・六八三頁下—六八四頁上。

⑱ 『授決集』では「序品疏釈三「土瑞」竟云。「当」知。此土從「一」出」

無量。非_レ頓而頓、非_レ漸而漸。其事已竟。必當_下収_二無量法_一還入_二一法_一、開_レ權顯_レ実、息_レ化歸_レ真、与_二彼土同也_一。」「言_三從_一一出_二無量_一者、始從_二華嚴_一至_二般若_一來、皆從_二一法_一開出、至_二般若_一時頓漸已竟。而人不_レ知_二法華出_一頓漸外。請觀_二竟字_一。法華但是収_二無量_一以歸_レ一」(智證全上・二三七頁下)と、『法華文句』(大正三四・二九頁下―三〇頁上)と『法華文句記』(大正三四・一九七頁下)の文が引かれる。

②〇 智證全上・三三八頁下。

②① 『法華文句記』卷一上の文は次の通りである、「驗知、論主全許_二一部_一為_二法門中勝_一、方指_二如是等_一為_二一切法門中勝_一。一切法門即_二一代教_一。不_レ然如何消_二积一切之言_一。既一代教中最為_二其上_一、具如_二藥王品中_一歎教文也」(大正三四・一五三頁中)。

②② 『法華玄義』卷一上「在_二四味教之頂_一離_二四誹謗_一」(大正三三・六八四頁下)。

②③ 『止観輔行伝弘決』卷三之一「今約_二修観_一且以_二三諦_一二諦、名為_二三種_一。若論_二經意_一八教四味。方名_二種種_一」(大正四六・二三二頁中)。

②④ 大正二六・一二頁中。

②⑤ 大正二六・一六頁中。

②⑥ 大正二六・一六頁中―下。

②⑦ 大正二六・一九頁上。

②⑧ 紙幅の都合で取り上げることのできなかった八教に関する他の用例は次の通りである。法華超八に関する内容である。智證全上・四頁上、六五頁上、六八頁上、六九頁上―下、一七九頁上、三一二頁上。

②⑨ 「寂徳」が義寂を指すことは前川「二九九五」(八九頁―九〇頁)において指摘されている。

③〇 前川「二九九五」八九頁―九〇頁参照。

③① 「安詳而起」の「安」に対する釈に対する終南(道宣の可能性あり)の説を批判するために基の説を傍証として引用している箇所が

あることが、前川「二〇〇四」(八六頁―八七頁)において指摘されている。

③② 大正二六・一一頁上。

③③ 大正二六・一二頁上。

③④ 智増菩薩と悲増菩薩については深浦「一九五四」(五一―四頁、六六頁、七〇―八頁)参照。基『成唯識論述記』卷七本「述曰、復有_二頓悟決定性人_一。有_下從_二初地_一即能伏_二一切煩惱_一……即十地菩薩。有_レ起_二煩惱_一、謂悲増上者。有_レ不起_二煩惱_一、謂智増上者」(大正四三・四八三頁上)などで説かれている。

③⑤ 智證全上・三九頁上―四一頁上。なお、『法華論記』における被接説については拙稿「二〇二三」で考察した。紙幅の都合、具体的な引用文などは本稿では割愛する。

③⑥ 大正二六・一八上。

③⑦ 法相唯識では、不定性の二乗は分段身を延ばす、つまり寿命を増すことによつて変易身を受けて、修行の後に成仏することができる。と説く。なお、定性の二乗は分段身を捨てて三界を離れて涅槃に入る。ので、変易身を受けることがないため成仏することができないと説く(寺井「一九九二」参照)。

③⑧ 『法華文句記』卷七下の本来の文は次の通りである。「釈_二增長_一中、二乗增長_二二解_一不_レ同。並今師意、前釈得_二小乘_一尽_二生死_一、方名_二最後_一次釈_二大乘_一中、方名_二後身_一。大小兩種並名_二增長_一。增長皆由_二值_一仏。衆生自謂_二当分增長_一。今準_二仏意_一莫_レ非_二地雨_一故令_二当分遠有_一增長。所以至_二此方知_一合_レ一。無後之言、且任_二小教_一。權名為_二無非_一永無_一也。若得_二法身等覺_一、一転當_レ入_二妙覺_一。乃云_二最後_一。論云。「羅漢發心已後、辺際定力、令_二分段身延至_一變易。不_レ復改_二報_一、成_二無上果_一者、此多屬_二通義_一。以_二通菩薩過_一二乘地_一。惑潤_二生身_一或不_レ經_二生而

有レ教深可レ為レ規」(大正三四・二九四頁下—二九五頁上)。

③⑨ 『法華論』では、「自レ此已下、為レ七種具足煩惱性衆生、説レ七譬喩、対レ治七種増上慢。応知。」(大正二六・一七頁中)とあるように、七種の煩惱染性を具足している衆生のために、七種の喩を説き、七種の増上慢心を対治することが示される。

④⑩ 大正二六・一八上。

④① 紙幅の都合で割愛したが、他宗派・他学派の人が天台の教判説を知らないために迷う、などの箇所は多くはないが他にも確認できる。例えば、『法華論』の五味を注釈する箇所には「他迷三旨_二故失_二五時_一」(智證全上・一七四頁上)とある。また、教判そのものではないが、七種功德成就を注釈する箇所では七権(人・天・声聞・縁覚・藏教の菩薩・通教の菩薩・別教の菩薩)の功德を破して一乘真実の功德を顕すことが説かれ、「世人未識七権之趣。何以会_二一論之旨_一」(智證全上・二頁下)と示される。

④② なお、「世人」の記述は他にも散見される。ただし、教判と関わらない場合もある。引用箇所を除いた自説部分と考えられる箇所における「世人」の記述は、該当箇所のみ記すと次の通りである。智證全上・二頁下三行目、五一頁下四行目、六二頁上四行目、八二頁下四行目。

④③ 安然『教時問答』巻二に「問。天台宗云、唯識論明_二別教地位_一。又云。「八識_二無我三性_二三無性等皆別教義也」。而何今云_二法相菩薩位是天台通教義_一。答。天台守護章云。「瑜伽所_レ説無常仏果是夢裏仏果、三獸度河之意」。又秀句云。「瑜伽論是三乘通教義也」。又深密中「第三時云_下普為_中發_二趣一切乘_一者_上」即是天台三乘通教義也。而天台有_二名別義通之義_一。故約_二名別_一且云_二別義_一。然実通義(大正七五・三九六頁中)とある。『教時問答』では、法相宗を通教と捉えている。その根拠に『守護国界章』や『法華秀句』、『解深密經』を引く。また、湛然の説とみられる『成唯識論』や八識・二無我などの説を別教とする説については、名別義通(名称は別教であるが、

義は通教)と捉え、別教ではなく実に通教であるとしている。この箇所は大久保「二〇一五」(一四八頁—一四九頁)によると、安然の『教時問答』などによる主張は、中国天台にはない日本天台による新しい展開と指摘がなされている。なお、現行の『法華秀句』には「夫瑜伽論者通_二三乘教_一」(伝全三・一一七頁)とあり、「通教義」とまでは記されていない。最澄が法相宗の義を通教と捉えていたかの検討は必要だが、安然の時点では法相宗を通教と捉えている。円珍が『法華論記』を撰述した時点での法相宗の位置づけの検討は今後の課題としたい。

④④ なお、『法華論記』には円澄問の「唐決」を踏まえて記したと考えられる箇所が一箇所ある。『法華論記』巻一末(智證全上・二八下)の六心中退に関する記述である。文の順番は前後するが、維錫の答と円澄の間で提示される引用文(新纂五六・六八六頁中)と同じものが引かれる。

参考文献一覧

浅井円道「一九七三」『上古日本天台本門思想史』、平楽寺書店。

浅野学「二〇一八」『円珍『法華論記』巻第七末における天台章疏の引用について』、『印度學佛教學研究』六六(二)、七一七頁—七二〇頁。

浅野学「二〇二三」『円珍『法華論記』所引の『法華論』について』、『印度學佛教學研究』七一(二)、五三頁—五七頁。

池田魯参「一九七八A」『円珍『法華論記』における天台研究の特質』、『駒澤大學佛教學部論集』九、九二頁—一〇七頁。

池田魯参「一九七八B」『円珍の『法華論記』について』、『印度學佛教學研究』二七(二)、三三二頁—三三六頁。

大久保良峻「二〇一五」『安然と最澄』、『最澄の思想と天台密教』、法藏館、(初出:「二〇一三」(多田孝文名譽教授古稀記念論文集)『東洋の慈悲と智慧』、山喜房佛書林)。

奥野光賢「二〇〇二」『仏性思想の展開—吉蔵を中心とした「法華論」受容史—』、大蔵出版。

河村孝照「一九八九A」「法華論記」に関する一考察』『法華文化研究』一五、一一—二六頁。

河村孝照「一九八九B」「智證大師法華論記にみえる佛身觀」「智證大師研究」、九四五頁—九七八頁、天台寺門宗智證大師壹千百年御遠忌局。

木内央「一九七三」「法華論記」（鈴木學術財団編）『大日本仏教全書』九七（解題一）、一四二頁—一四四頁。

金炳坤「二〇二〇」「流支訳『法華論』の流布本について—序品を中心として」、『妙法蓮華經優波提舍の文献学的研究』（法華經研究叢書Ⅱ）、三五六頁—二四二頁、身延山大学国際日蓮學研究所。

小寺文類「一九七五」「日本天台における教判の受容」「印度學佛教學研究」二四（一）、二八〇頁—二八三頁。

高崎直道「一九七七」「法華論記」（鈴木學術財団編）『増補改訂日本大藏經』九七（解題一）、三四四頁—三四七頁。

寺井良宣「一九九二」「法宝の唯識思想批判の考察—變易生死と二乗作仏の問題を中心に—」、『佛教學研究』四八、一頁—二五頁。

苦米地誠一「二〇〇八」「円珍の密教思想について—在唐時の著作—」、『平安期真言密教の研究第一部 初期真言密教教学の形成』、五三五頁—五六〇頁、ノンブル社（初出：「一九八八」「智證大師円珍の密教思想について—在唐時の著作—」、『大正大学綜合佛敎研究所年報』一〇、一四頁—三一頁）。

裕慈弘「一九四八」「平安時代に於ける法華超八の思想とその胚胎—法華至上思想の擡頭—」、『日本佛教の開展とその基調』上卷、一九三頁—二一九頁、三省堂。

深浦正文「一九五四」「唯識學研究」、永田文昌堂。

前川健一「一九九五」「円珍『法華論記』の引用文献—未詳文献の解明を中心に—」、『インド哲学仏敎教学研究』三、八九頁—一〇三頁。

前川健一「二〇〇二」「円珍『法華論記』の法華思想—「釈序品」に於ける『法華玄贊』批判を中心に—」、『東洋哲学研究所紀要』一八、三頁—二二頁。

前川健一「二〇〇四」「円珍『法華論記』の法華思想（二）—「釈方便品」に於ける『法華玄贊』批判（二）—」、『東洋哲学研究所紀要』二〇、八三頁—九六頁。

前川健一「二〇〇五」「円珍『法華論記』の法華思想（三）—「釈方便品」に於ける『法華玄贊』批判（二）—」、『東洋哲学研究所紀要』二一、四一頁—五二頁。

水上文義「二〇〇八」「智証大師円珍の仏身論」、『台密思想形成の研究』、一〇七頁—一四四頁、春秋社、（初出：「一九八九」「智證大師圓珍の佛身論—菩提場經略義釋を中心に—」、『智證大師研究』、六五三頁—六七三頁、天台寺門宗智證大師壹千百年御遠忌局／「一九九六」「智証大師円珍における法身大日如来」、『天台學報』三八、五一頁—五八頁）。